NO.27　　ガット　　1979.5.1発行

ガット

東村山市民テニスクラブ協議会機関紙

発行責任者　柳　利夫
住　所　東村山市萩山町5-6-26-301
Tel.　0423-92-8808
編集者　川村英明

創立七年目を迎え さらに頑張りましょう

協議会会長　柳 利夫

5月3日でクラブ創立満6周年になり、私たちのクラブも7年目に入ります。さしづめ人間でしたら小学校入学というところです。

1973年5月3日に僅か数人の人たちが集まりつくったクラブでしたが、今では会員数・二百数拾名の大世帯になってきました。

創立当初の1～2年間を識っている方には、日常の運営面などを比較したとき雲泥の差といいますか、正しく今昔の感を抱かれるかと思います。

今日の私たちの市民クラブが立派に活動・運営されているのは、この間に会員の皆さんが自分たちのクラブづくり、コートづくりに絶えず関心をもち、積極的に参画してきたからこそだと思います。

現在では、全国的に見ても極めてユニークな地域テニスクラブだと評価されております。

組織活動や運営にも三年・五年・七年・十年といった節々があります。

今後は現在の5クラブを、さらに市内13町の町名を冠した地域クラブへと発展させていく努力が必要です。

日頃、日常の運営面などについてお気付きのことがありましたら遠慮しないで、どしどしと提言いただきたいと思います。

是非皆さん共々頑張っていこうではありませんか。
楽しく、いつでもテニスができるようにするために。

七年目　おめでとう

恩多クラブ会長　浦川 親俊

東住クラブ誕生より今年の5月3日で7年目を迎える事となり、まことに御同慶に堪えません。創立当時5人位で始められたそうですが現在240名近くの大世帯に発展し、更に年々増えることは確実ですので前途洋々たるものがあります。

テニスブームにのり、またコートの条件も良かったとはいえ、何といってもテニスに熱心に打ち込んでいるメンバーの独り独りのマナーの良さ、家族的な親睦、懇切なる技術指導、組織的な運営の良さ等が一体となったことが今日に到らしめたといえましょう。これからも全員で楽しくテニスを通じ親睦のおつきあいを続けてゆく様願っております。

石の上にも3年といいますが、私も今年の9月で満6年になります。技術的には仲々進歩がないのですが、下手なりに結構楽しく試合もやれる様になり満足しております。これからも超壮年組の一員として大いにガンバル積りです。市民テ協の益々の発展を祈り7年目を迎えるに当たり御祝の詞と致します。

我が師・柳利夫氏

（テニス入門第一日目）

東住クラブ　広川 一夫

私が初めてテニスを教えていただいたのは現市民テ協議会会長の柳利夫氏である。当時氏はすでに、髭は濃いが、おつむはお天道様も少々まぶしがるほどになった中年紳士であった。そのずっとずっと前からお酒が大変好きであったことはいうまでもない。テニス歴8年とかで、田無のあるスクールで腕を磨いた達人であった。氏はテニスという素晴しいスポーツを自分だけで楽しんでいたのでは、「いつでも・どこでも・だれでも」という彼の信奉する主義に反すると感じ、自分の住む団地の掲示板に「練習家内のポスター」を出したのである。これは今から7年前の4月上旬の、中学校の校庭の桜が満開の頃のことである（クラブの創立総会が大々的に柳邸で行なわれたのは、その約1ヵ月後の5月3日であった）。

この掲示を見た私は、喜び勇んでコートに出かけました。コートには3人の妙齢の御婦人と、氏のお弟子さんという石神井公園あたりからはるばるやってくるI氏がいた。柳氏はラケットの持ち方・スタンス・テイク・バックと丁寧に教えて下さった。グリップはいわゆるイングリッシュ・グリップでしかもうんと立てること、スタンスは一足程度開いてクロス気味にすること、テイク・バックは弓なりに大きく、即ち思いきりラウンドに引くこと等々であった。以上の説明の後「ボールを送るから打ってみなさい。スポーツは、テニスも例外でなく、習うより慣れよだから」といって、愛の鞭とでもいうべきなのだろうか、物凄いスピードで、かつ又存分に球を左右に散らして下さった。氏は疲れると、お弟子さんのI氏が、これ又猛スピードで球送りをして下さった。私はというと、軟式のくせでこねまわすものだから、右手の親指のつけねのところにはすぐ肉刺が出来てしまったが、3時間にも及ぶ猛練習もなんとか無事終了した。

しかし、氏には自慢のテニス以上の得意種目があり、その日早速コート脇の芝生でその指導を受けることになった。いつ電話をされたのか、芝生の上には冷えたカン・ビールがピーナツと一緒に、1人2本分はあったと記憶しているが、届いていたのである。芝生で2時間程（我々男性のノルマは3本であった）このレッスンを受けたが、氏はこの位の鍛え方ではまだまだ不充分と思われたらしく、柳邸に場所を移して、この第2部の指導は深夜まで続いたのであった。知らない人がこれを読んだら、氏はテニスよりもドリンキングの方を熱心に教えたのではないか、と感違いされるかも知れないが、神に誓って、柳氏にかぎってそのようなことは決してない。そのような誤解が万が一にも生じたとしたら、それは偏に私の書き方が悪いためである。

これが私が柳氏にテニスの手解きを受けた第1日目の概略であるが、この世界に誇る市民テニス・クラブの練習も当時は毎回こんな風で、今とは少々違う、少数精鋭（特に第2部は）が集まる、家族的な楽しい楽しいクラブであった。

市民テニスクラブ七年を記念して

恩多クラブ会長　阿辺川 貞夫

まず一言に言って充実したと申せましょう。技術面に於てもクラブ活動、運営に就いても、他に類を見ない我がクラブを自画自賛いたします。これも一重に先に立つ諸先輩、指導者の方々の並々ならぬ御努力のたまものと深く感謝いたします。

所で私のテニス歴五年目を記念し、振り返ってみますと、何時充実した一人前のテニスになるだろう、毛の生えた硬式ボールを初めて手にして五年目、いまだにあやふやなミスの方が多い有様です。最初の一年、フワーッとした高い球が何処に飛ぶのか、落ちてみなければわからない、強く打てばアウト、低く打てばネットに悩まされ乍ら、運動の為め等と我れと我が身に言い聞かせ、先ずコートに通う事に意義ありとばかり自分を慰め、重い足に鞭打って休まず出ました。

二年目、時にはネットすれすれの球が入ると（これをまぐれと言う）世の中はサッと明るくなり、人生の喜びを一身に背負ったかのようにひそかに感じ、この辺からテニスの面白味を覚えコートに出る事に生き甲斐を感じる程になりました。三年目、思うコースに時たま打ち込めると、またまたテニスのダイゴミを覚えとりこになって、此の頃より本物のテニキチと申せましょう。テニス以外に何も考えないはめに落ち込んで夢に迄見るのが此の頃でしょう。

四年目、やっと同程度の人達と試合が出来るようになりはしたものの、後から始めた人達に追越されて、見る影もない自分にいや気がさす事もしばしば、人生の悲哀を感じ乍らも、年令の問題等と都合良く解釈し、失われる気力を体力の為めに振り替え、もくもくとラケットを振り廻しては居ります。

そして五年目に入った今日、依然として不安定に付きまとわれ、上達のまぼろしを追ってあせらず、テニキチも卒業しました。まだテンポは遅くとも幾分成長して居るかに思われますが、年令に勝てない時が来る事が間近いものと承知しては居ります。多数の知人も出来、コートに行く事を楽しみ乍ら、少しづつでも向上する事を願って、何年続くか、皆様と共にテニスを楽しみたいと思います。

翔んでる女以上に白球を飛ばしている女

○△生

近頃、巷では、マスコミ関係とか、その他特に、時代の先端を行く仕事の中に身を置いて、はりきって仕事をしている女がキャリヤウーマンとか、翔んでる女とか、さかんにもてはやされている。

男からすると，愛を語るにはどうも荷がかち過ぎる女であり、内心は可愛げがないだろうとか、女に何が出来るかと疑ぐったり、女は能力より愛らしさ、やさしさが必要なのだ、とか言うと、古い体質の持主だ!!　女の敵だ!!などと攻撃の的にされるので、決して心の中は見透かされないようにしている。小生、7周期目に入った当テニスクラブに約5年間の付き合いがあるが、この際だから、常々、口には出さないで、心の奥深くしまい込んでいたことをチョッとすべらすとする。

もし小生が生まれ変って女となるならば「翔んでる女、キャリヤウーマンなどともてはやされ、けしかけられても、蹴とばして、絶対に、絶対に、休日にテニス、いや休日どころか御主人様の汗水流して働いているウィークデイにも無邪気に、天使の如く、いや悪魔の如く、白球を飛ばしている女に私はなりたい」といつも思っている。

そして御主人様が疲れて、御帰宅あそばされましたら、楽しそうに今日のテニスを話して聞かせたい。そうすれば疲れもとれるだろうと思う。この様な夢物語を語るのは、少々誤解されそうな気がするが、何も下心があるのでは決してなく、自分の愛する女が幸せなんだなあ〜と素直に拍手を送っているだけである。

多分、当テニスクラブの女のやさしい御主人方も同様の気持であり、心にモヤモヤなど全くなく、気持良く休日の朝食を一人で食べていらっしゃる、と思う。また当クラブの女の方々は「女は今迄ガマンしてきたのョ、今後はメザメなくちゃ」などとユメユメ、その様な気持は持たず、感謝と幸せを思いながらさわやかな青空に白球を追っていらっしゃると思う。

毎日がこの様に過ぎていくのです。そうです、当テニスクラブも7周期といわず10周期、いや20周期も夢ではないと思いませんか。

"市民テニスクラブ　バンザイ"　（オレンジボウル）

夏季合宿の思い出

青葉クラブ会長　高瀬 欣也

今年で創立7周年と云うことですが、本当に月日が経つのは速いもので、浦川先輩といっしょにこのクラブへ入れて戴いて約6年になります。東住以外の会員の第1号だったと思います。大きいラケットを振ればパワーがつき卓球が強くなるだろうと云う単純な動機で始めたテニスですが、段々エスカレートし、乳前教室、飯田教室を受けに世田谷くんだり迄遠征して、ついにテニスの魅力に取りつかれてしまいました。

今迄楽しい事が沢山ありましたが、中でも合宿は色々の思い出を作ってくれました。第1回の山中湖合宿での柳さんと青山君との会の運営についての大論争？、第2回の最後迄雨に悩まされた尾瀬合宿。宿の主人が見かねて神和住が強打しても割れないガラス張りの室内練習場がありますと案内されてビックリ、何のことはない冬のスキーの休憩所、今となっては楽しい思い出です。以後、私たちの合宿は天気の安定している梅雨明け直後に定着しました。

第3回の合宿として内定していた朝霧高原で下見をかねて春のミニ合宿を行ないました。ところが遊園地の中のデコボココート、一同唖然としてしまい、私たち幹事の責任の重さを痛感した次第です。太田先生の紹介で急遽那須に変更、この那須グリーンウッドは大成功でした。施設及び全天候型のメインコートを含み50数面のコートを有する大変すばらしい環境です。朝5時からメインコートで有名選手になった気分でゲームを楽しんだのもいい思い出です。女性群が猛ハッスルし、木村さん・東原さんが急成長されたのもこの合宿だったと思います。テニスの都市対抗大会が行なわれていて野村、待鳥選手の競技を直近に見学出来たのも私たちにとって大変勉強になったと思います。大変好評だったので翌年も同じ那須で行ないました。

この4回の合宿を通じて私のテニスの技量がアップしたことは事実ですが、それにも増して気の合った沢山の友達が出来たこと、又我がクラブが7周年を迎えるにふさわしい立派な会に成長したことを本当に嬉しく思って居ります。

（その3）へつづく

私とテニス〈連載18〉

東住クラブ　則末忠衛

私が東住テニスクラブに入会させていただいてもうすぐ5年になろうとしております。私自身がスポーツを行なったり観たりすることが非常に好きなので、このクラブに入会する時も何のためらいもなく入会させていただきました。（それでも入会する時は非常に緊張したものでした。）

中学校時代から大学卒業後2年間、延12年間というものは陸上競技部に籍を置いて日夜、練習に励んだものでした。当時はテニスコートに急ぐ部員を横目で見ながらグランドへ一直線。その時、よく思ったものでした。〝テニスって面白いのかな〜〟と。

ところが今はどうでしょう。グランドよりテニスコートに足が向く方が多くなりました。今ではラケットを持たないと何だか淋しい感じがしますし、一寸暇をみつけてはラケットを振ってみたりしております。

私自身テニスがこれ程楽しいスポーツとは思ってもいませんでした。何が楽しいかというと、(1)グーンと打ち抜いたフォアハンド・ストローク、(2)スムースにスイングできた時のバックハンド・ストローク、(3)レシーバーが一歩も動けぬ程のサービス、(4)タイミングよくポーチにでてヒットした時のボレー、(5)〝エイッ〟とばかりに打ち込んだスマッシュ。このような時に〝これが硬式テニスの魅力〟。本当に〝スカッ〟とします。みなさんもこのような経験があると思います。

〝エッ、私なんか一度もそんな経験ないですワ〟、〝大丈夫ですよ〟、練習しているうちにこのようなことが感じられてくるものですし、意識してプレーしていると自ずから感じられると思います。これはテニスに限らずどのスポーツでも同じですが、スポーツで汗を流した後の水のおいしさ。〝フー疲れた〟と〝ドカッ〟とベンチに腰掛けた時の快い疲労感。このようなことはスポーツを行なった人のみが知る得も云われぬ快感、開放感ではないでしょうか。

私は市民テニスクラブの人達がプレーしている時に一寸気になることがあります。第1は、コートに入りプレーする前に充分に各自が準備運動し、身体を暖め筋肉をよくほぐしてからプレーする必要性をもっと感じて欲しいと思います。第2は、コート内にボールが転がって放置されたままプレーしている場面が見られます。1・2点ともお互い同士が健康で安全に楽しくプレーする為に必要なことです。これらのことを守り、よりよい市民クラブにしたいものです。

新体連・三多摩連盟春季大会
女子ダブルスで1・2位の栄冠！

さる4月15日（日）、武蔵美術大のコートで開催された新日本体育連盟・三多摩連盟が主催した春季競技大会の男・女ダブルス戦は、女子6組・男子21組の選手が参加し、それぞれに熱戦を繰りひろげました。

試合はトーナメント方式で、男・女とも敗者復活戦をも含め夕方5時近くまで覇を競い合いました。結果は、女子ダブルスで私たち市民テ同士の優勝戦となり、シーソーゲームの末前回の秋季同大会で優勝した栗原・下谷組が木村・柳組を6：5で降し1位になりました。男子ダブルスでは市民テの長井・藤岡組が3位入賞を決めました。

なお、市民テからは男子・4組、女子・3組の選手が参加しました。

〝七周年記念に寄せて〟

長井庸二

七周年を記念して何か書けとのこと、標題とは全く関係ありませんが、ミスということについて思いつくままを書いてみます。もちろん、「お嬢さん」の方ではなく「やりそこない」の方です。

私は「火事」をメシの種としていますが、火災の原因を見てみますと大半、というよりはほとんどのものがミスをしなければ、チョットした不注意が無ければ、火災とはならなかったものです。火災のミスは死につながります。また、家や財産をすっかり灰にしてしまいます。

これに比べればテニスのミスなどはどうということはないのかも知れませんが、そうは言っても我々テニス（ウー）マンにとっては事は重大なのです。一つのミスがゲームの勝ち負けを左右することを皆さんもよく経験されていることと思います。テニスというものはミスの少ない方が勝ちです。特に我々のクラスでは、ポイントのほとんどは相手のミスによるもので、ナイスショット（エース）による得点は10%あるかどうかといったところでしょう。また、サービスミス及びレシーブミスが非常に多いように思われます。サービスが入り、レシーブが返り、それ以後に決まるポイントがどれ位あるでしょう。がっかりする位しか無いのではないでしょうか。一度、統計を取ってみると面白いかも知れません。

ここに一つの提案があります。それは一本のガマンのストロークというものです。「バシッ」と打ちたいと思っても、その一打は強打せずガマンのストロークとして相手コートの深いところへとにかく一本続けます。そして次の一打で決めるという心づもりです。これでかなり負けないテニスができるのではないでしょうか。

でもしかしですね、提案はしてみたもののそんなのナンセンス！打ちたい時に打ちたいように打つのがテニスで、我々は我慢するためにテニスをやっているのではないのです。一本だけ「スカーット」するショットがあれば、その前に10個位のミスがあっても全々苦にしないのが楽しいのです。それが愉快なのです。「テニス」の語源は「多ミス」です。

上釜博君　交通事故で重傷

恩多クラブの上釜さんの長男・博君（小1・6才）がさる4月14日夕方6時頃、三中入口近くの新青梅街道で信号待ちをしていたところ、トラックが突び込んで来、前輪で右足大腿部をひかれ重傷を負いました。

市民テ有志が発起人となりさる4月22日何時もの練習コートで参加者へカンパを訴えたところ、50人近くの方から総額で26,000円の募金が集まり、同日夕刻、早速事務局長の笹野井さんと私が病院へ博君を見舞いお届けしてきました。

紙面を借りて厚くお礼申しあげます。

なお、今後も博君は手術が更に繰り返されることも考えられますので、その節には皆さんからの献血をお願い致します。

〈記・柳　利夫〉

〈編集後記〉　七周年記念の原稿をたくさんありがとうございました。次号におくったものもあります。博君早く元気になって下さい。市民テ女性の活躍が、このところ目立ちます。春季市民大会にはみんな頑張りましょう。